

水入を引、翌日二度も吞せ、三日目には三度計吞せ、十日計の間付添水を相用、夫より庭籠へ水日  
日宜敷、自然ふんゆるみ毛冠亂れ候は、隨分入念薬飼等可致事、粒餌に糲を少シ宛飼候得ばよ  
ろしく、餌押張り糞に氣を入、堅まり候は、兼而ぼれい飼置べし、尤糞にかたまり白油の付候方、  
鳥の勢イ宜と相心得、兎角餘鳥と替り十分の肉には上りかね候、平生けら虫いなご等飼置、肉上  
り兼候は、雀の生肉鷹に飼候様に刻み、日々三度計相用宜、勿論寒中には虫も取得兼候故、三日  
越に雀を飼候へば元氣宜敷方に飼置事、世の人不知所也、可秘也、餌にも火取雀を常に魛の粉に  
交相用候得ばよし、夕方にはかならず高キ所<sup>江</sup>泊度飛上り候ゆへ、氣を付、右様無之よふに羽を  
切り候事、東都小川町邊倉橋何某と申御旗本衆、多年孔雀を被相生立候に付功者にて、冬中長持  
に入臥せ被申、快晴の時分は庭の内放し、曇日には籠に入置て、弱方の鳥には白餅米に黍にては  
如何可有哉、未其ためしは不致雛のうちは萬端氣を付ずしては、皆生立取事不叶思ふ、先年長崎  
にて出島紅毛尾敷<sup>江</sup>行シ所にかびたんトンヘルケと云紅毛人に逢、孔雀之事委しく相尋候得  
共、紅毛國にて澤山致飛行、兼而大木の縁に泊り居下り、糲を拾ひ鱈の類を取よし、其節は尾羽も  
どろによごれ、飼鳥程に奇麗にも無くとの物語り聞し也、能く鳥の氣を知り、能く鳥を飼ものは、  
紅毛人にあるべし、鳥より氣を見らる、といふはなき事に候得共、孔雀、白鷗、九官、八々鳥の類、人  
にさ、わり候鳥、一生人に寄障ると不障と有是も鳥より氣を見らる、見られざるとの二ツ也、  
和鳥之小鳥にも平生蜘蛛にても飼餌入の水にても取りかへ候人には、鳥も見覺籠の内にて、其  
人の方へ寄ルゆへ、數羽飼鳥のうちにも氣に入鳥も、入らざる鳥も、心を配り飼置べし、誠にかご  
の内鳥と申ごとく、外頼みなきものにて、飼人心得肝要、よく思へば、かわいらしきものとお  
ぼへし也、

〔東大寺正倉院文書<sup>三</sup>〕園池司解 申請直丁并鳥料糲事<sup>〇</sup>中